

## 法学的視点を醸成させる授業づくり

### —中学生に求められる法的リテラシーの探求—

菊地 洋<sup>1</sup> 七木田俊 藤村和弘 木村義輝<sup>2</sup>

(令和2年3月4日受理)

#### 1. はじめに

「法教育」とは、一般的には「法律専門家でない人々に対する、法に係わる基本的な知識、考え方、さらにはそれに必要な技能等の教育」とされ、「法教育」が教育現場で意識されるようになって20年近くになるが、教育実践の多くは社会科教育の枠内でとどまっているように思われる。だが、私たちが社会生活で求められる「紛争解決能力」とは、社会をはじめとする教科教育の枠だけで担えるものであるのだろうか。本研究は、この素朴な疑問に端を発するものである。

学習指導要領解説総則編では「主権者として力」が例示の一つに挙げられ、法教育の充実を明記している。しかし、法的なものの考え方について、例えば中学校社会「公民」では、現代社会の諸問題を考える際の基本的な視点として「対立と合意」や「効率と公正」という概念は示されているが、このような視点を実際に社会的な課題や紛争に解決に用いる際の「法的な考え方」が具体的に示されていない。

一方で、高校で設置される「公共」では、「法や規範の意義及び役割、多様な契約及び消費者の権利と責任、司法参加の意義などに関わる現代社会の事柄や課題を基に、憲法の下、適正な手続きに則り、法や規範

に基づいて各人の意見や利害を公平・公正に調整し、個人や社会の紛争を調停、解決することなどを通して、権利や自由が保障、実現され、社会の秩序が形成、維持されていくこと」の理解に必要な知識及び技能の習得を求められている（下線筆者強調）。

このように高校の「公共」で求められる法教育の内容が拡張されつつあるなかで、高校の前段階である中学生の段階でどのような能力を養う必要があるのだろう。少なくとも、従来の狭義の「憲法教育」あるいは「主権者教育」を中心とした知識型の教育とは異なり、正義や公平・公正といった法的価値を理解し、それらの価値に照らして物事を考えたり、意見の異なる他者と理性的に議論・交渉したりする技能が必要とされるはずである。こういった技能は、社会科教育の枠にとどまるものといえるのであろうか。

本研究では、中学生の身の回りで起こり得るような事例を素材にして、この解決方法（本研究で提示した事例では、発生した損害に対する責任と「費用負担」）を中学2年生・3年生に考えさせ、提示された解決方法を比較することで、中学生という発達段階における問題解決に必要な法的価値またはそれをういた法的な見方・考え方をどのように習得できるかを検証する

<sup>1</sup> 岩手大学教育学部社会科教育科 准教授

<sup>2</sup> 岩手大学教育学部附属中学校 教諭

ものである。

## 2. 附属中での法教育実践

附属中では、この数年、弁護士を招いた法教育授業を実施している。この授業実践については、過去の本報告書に掲載している。この数年、法的な見方・考え方の発達と比較検討を行うため、新しい教材を開発するのではなく、2年継続して、2つの教材－「交差点、出会い頭の衝突」「ゲーム機が壊れちゃった」－を利用し、2年生・3年生それぞれ4クラスの計8クラスを2つに分けて、相互に違う内容の教材を用いて、弁護士を招いた授業を実施している。（3年生は、今年度に受講していないいずれかの教材を2年生で受講している）。

以下では、学年による解決策の違いを中心に分析を試みたい。

### （1）実践授業 A

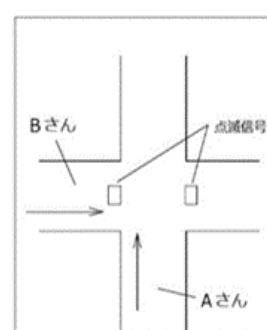
#### －交差点、出会い頭の衝突－

##### （a）教材内容

中学生 A さんは、学校から帰宅後に塾へ出かけた。いつもより 30 分遅くなってしまう。「コンビニでパンと飲み物買いたいけど・・・」「遅くなると怒られるなあ」などと考えながら、いつもよりスピードをあげて自転車を走行。夕暮れ時、薄暗くなって、A さんは自転車のライトを点灯。普段から交通量の少ない住宅街、中央に白線も引かれていない狭い道路だが、念のためスピードを少し落として（時速 10～15km。一般的な自転車のスピード）交差点へ進入。一方、高校生 B さんは、歩きスマホでゲームに夢中になっていた。交差点に差し掛かり、一瞬スマホから目を離して前をみた

ものの、歩きスマホでゲームをしながら交差点へ。

自転車の A さんの方には信号機や停止線はない。歩行者の B さんの方には点滅信号（赤）がついていたが、B は停止せずに交差点へ進入。その結果、A さんと B さんは衝突、A さんは右足親指にひびが入る全治 3 週間の怪我を負い、自転車は大破。B さんは両足ふとももの複雑骨折で入院 1 カ月、全治 3 カ月の大けがを負う。



この事故による治療費・修理費の状況は以下のとおり。

A さんの治療費と慰謝料	15 万円
A さんの自転車の修理費	5 万円
B さんの治療費と慰謝料	100 万円

これらをどちらがどれだけ負担したらよいのだろうか？

##### （b）授業展開

教材を記載した資料プリントと学習シートを配布し、個人で 5 分間考えさせた後、4 人グループになり 10 分程度討議させた。その際、複数の弁護士が机間巡視して、討議に助言を行う。

その後、A と B の代理人役の弁護士がそれぞれを擁護する主張を行う。

A の代理人：B の歩きスマホが原因。A は徐行したが、歩きスマホの A を避けることができなかった。B 側に点滅信号があり、注意を要する道路。A の落ち

度があるとは言えない。

Bの代理人：Aが責任を負うべき。夕暮れ時で薄暗いなか、自転車にはより慎重な走行（より高い注意義務）が求められる。道路交通法では、自転車は「軽車両」に該当し、歩行者の進行を妨げてはいけない。危険な乗り物だからである。A代理人はスマホ歩きを指摘していたが、歩行者という点では高齢者や幼児等者と同じ（車両に対して）弱者には変わらない。

質問などを受けた後、これまでの主張等を参考にして、グループとしての結論（費用の負担割合）をまとめることにする。

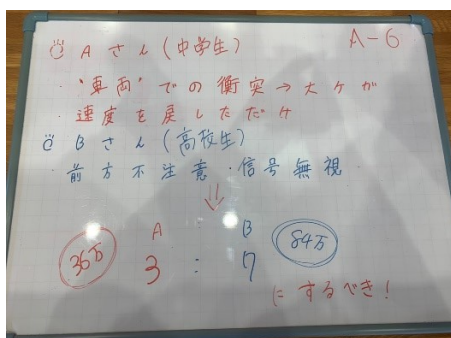
#### 2年生からの質問

- ・交差点に進入する際、自転車の進入スピードに上限はあるのか？
- ・赤の点滅信号の意味は？
- ・Bの治療費や慰謝料という負担額がAより大きいのは、Bの損害が大きいということか。
- ・歩きスマホは自分のせいである。老人や幼児とは違うのではないか。

#### 2年生のグループ討議の結果

- ・ Aが悪い 0班
- ・ Bが悪い 0班
- ・ 両方 A重い 5班
- ・ 両方 B重い 10班
- ・ 両方 同じ割合 1班

Bが悪い



(Bの責任を重く考える2年生の例)

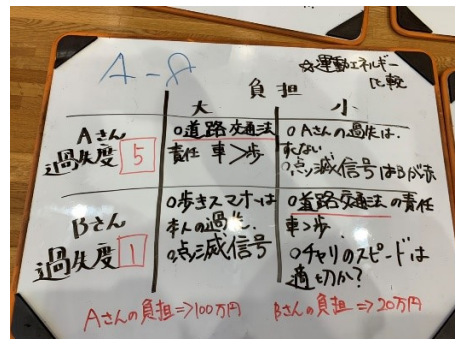
#### 3年生からの質問

- ・ Bの重い怪我を指摘する意味は。
- ・ 薄暗かったのだから、Bだって気をつけるべきだったのでは。
- ・ Aはただ走っていただけというが、自転車が強者の車両にあたるのであれば、それではダメではないか。
- ・ 歩きスマホは悪いこと。高齢者や子どもと同じとはいえない。

#### 3年生のグループ討議の結果

- ・ Aが悪い 2班  
(歩行者がいつ来てもいいようにすべき)
- ・ Bが悪い 1班  
(弱者がわがままして良いわけではない)
- ・ 両方 A重い 9班
- ・ 両方 B重い 7班
- ・ 両方 同じ割合 1班

Aが悪い



(3年の場合、多角的に分析していることがわかる記述内容)

#### (c) 2年生と3年生の比較

上記の結果からも明らかなように、B(歩きスマホ歩行者)に費用負担を重く考えるのが2年生の特徴といえる。これは、彼らがこれまで受けてきた道徳などの教育に基づき、歩きスマホは公共マナーとして悪いという道徳的価値に基づき判断を導い

ていることを意味するのではないだろうか。例示したホワイトボードからも明らかなように、提示した事実を多角的に検討することなく、結論を導き出していることがわかる。一方、3年生の場合、提示した事実を用い多角的な検討を加えた判断をする傾向が強い。例示したホワイトボードや回収した生徒の学習シートの記述からも明らかである。

授業後の生徒の感想からは、2年生は「自転車と歩行者など立場の違いをよく理解して考えることが大切だと思った」（女子）、「それぞれの主張のどこを大切にしているのかなどを実際に話し合ったりしながらできたのは良かった」（男子）といった一般的な感想であるのに対して、3年生は『『どちらが悪い』というより、『どちらが原因（を多く作った）か』という点で判断されるというのは意外だと感じた』（女子）、「一般的に『良い行動をした』『悪い行動をした』という考え方ではなく、どの部分がどのように問題があったか論理的に考え負担額の比率を考えることが重要だと思った」（男子）など、法的な見方・考え方に言及するコメントが多く見られた。これは、昨年度にもうひとつの教材を用いた授業を受けた結果であるのか、公民分野を学んだ成果であるのかは、これだけでは判断できない。

## （２）実践授業 B

### —ゲーム機が壊れちゃった—

#### （a）教材内容

A は発売されたばかりの小型ゲーム機（定価 3 万円）を学校に持ち込み、昼休みにクラスメートに自慢する。B も購入した

かったが買うことはできなかった。B は羨ましいと思うと同時に、校則違反ではないかとも思う。そこで、A が教室から離れた隙に、B は A のロッカーから無断でゲーム機を持ち出すことにした。自分で楽しんでも職員室に持っていき、担任の先生に「A が校則違反で持ち込んでいた」と渡すつもりであった。

放課後、B は A のロッカーからゲーム機を取り出し、自分のポケットにしまうとそのまま教室から廊下に出ようとした。ちょうどそのとき、廊下を左方向からすごい勢いで走ってきた C と衝突する。C は、体育館で部活動中に負傷した D のために教員を呼びに行くところだった。C との衝突により、B はゲーム機を隠そうとしてポケットに入れていたが、この衝突で飛び出してしまい、柱に激しくぶつかり壊れてしまう。この中学校では、ゲーム機の持ち込みは禁止されていた。また、学校の廊下を歩き時は左側通行で、走ってはいけないことも決められていた。A は、担任から校則に違反してゲーム機を持ち込んだことを厳しく注意を受けた。

A はゲーム機を修理に出そうとしたが、損傷が激しく修理は不可能と言われた。また、このゲーム機はどの店にも在庫はない。A は B と C に対して壊れたゲーム機の定価 3 万円を払ってもらいたいと考えた。

#### （b）授業展開

事前に教材を記載した資料プリントと学習シートを配布し、冒頭 5 分ほど個人で間考えさせた後、4 人グループになり 10 分程度討議させた。その際、複数の弁護士が机間巡視して、討議に助言を行う。

その後、4 人の弁護士がそれぞれの見解



を述べる。

弁護士1：Aは責任を負わない。BとCが責任を負う。ゲーム機が壊れたのはBとCの衝突によるもの。ゲーム機を持ち込んだこと（校則違反）は担任から注意で済んでいる。

弁護士2：A、B、Cが責任を負う。ゲーム機が壊れた直接の原因はBとCの衝突。ゲーム機を持ち込みを禁止している理由には高価なものを持ち込みトラブル防止の意味もある。その点で、ゲーム機を持ち込んだAにも責任がある。

弁護士3：Bだけが責任を負う。校則違反は学校と生徒の関係。Aがルールを破った罰は先生に怒られたことで済む。それに加えてゲーム機の代金となると二重処罰になってしまう。Bは他人の物を勝手に持ち出す。他人の物を持ち出したらきちんとした状態で返さないといけな。その点でBに責任。Cは廊下を走っていたが、Bがゲーム機をポケットに入れているとは予想できない。予想できないことには責任を負う必要はない。

弁護士4：Cだけが責任を負う。BとCの衝突でゲーム機が壊れたが、廊下を走れば、誰かと衝突しその拍子に何か壊れることは誰にでも想像できる。

質問などを受けた後、これまでの主張等を参考にして、グループとしての結論（費用の負担割合）をまとめることにする。

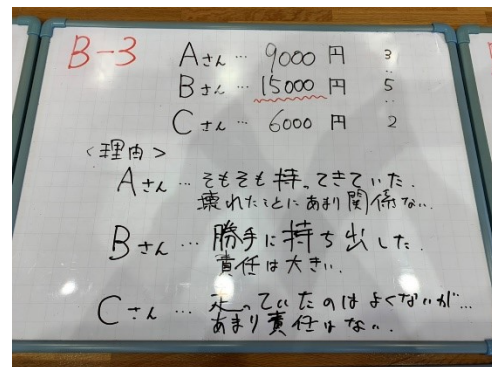
#### 2年生からの質問

- ・ Aが持ってこなければ壊れなかったのだから原因を作ったのはA。Aが責任を負わない理由は。

- ・ Bが盗らなければ起きてない事故という点について、Bが責任を負わない立場では考えるか。
- ・ Cは怪我人がいて緊急事態だったのに、という点をどう考えるか。
- ・ A、B、Cに責任ありの立場は、どれくらいの割合と考えているのか。

#### 2年生のグループ討議の結果

- |              |    |
|--------------|----|
| ・ Aゼロ、BとC    | 9班 |
| ・ A B C 責任あり | 7班 |
| ・ Aのみ        | 1班 |
| ・ Bのみ        | 0班 |
| ・ Cのみ        | 0班 |
| ・ AとB、Cゼロ    | 1班 |



（割合は異なるが、3人の責任をそれぞれに検討する傾向）

#### 3年生からの質問

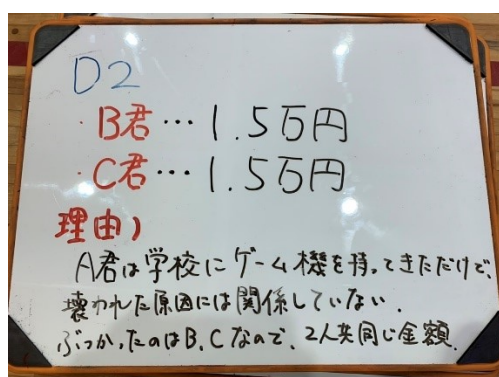
- ・ Dが命に関わる状態だったとしたらどのように考えるのか。
- ・ 告発するなら証拠が必要。Bが証拠を集めるためにしたのだから多少のことは許されるべきでは。
- ・ 持ち込んだという原因を作ったAが責任を負わないというのは、2年時の交通事故の法教育授業で学んだ責任の考え方からするとおかしいのではないか。
- ・ 校則違反と人として間違ったこととどちらが重い。

- ・ Bが持ち出したのは悪いが、壊れることは予想できなかったのではないか。
- ・ Bは持ち出さずに先生に報告することができたのに、持ち出した点を指摘する主張があったが、Bに責任を負わせない立場はこれをどう考えるか

### 3年生のグループ討議の結果

- ・ Aゼロ、BとC 4班
- ・ A B C 責任あり 6班
- ・ Aのみ 0班
- ・ Bのみ 3班
- ・ Cのみ 0班
- ・ AとB、Cゼロ 4班
- ・ 学校8割+ゲーム会社2割

(Cを走らせた先生、学校で起きたこと…、中毒性あるもの作った会社の責任…)



(原因と結果、関係性を検討した事例)

(c) 2年生と3年生の比較

この事例は、学校生活で起こり得る事案であり、登場人物も多いことから、生徒の意見も分かれた。2年と3年の差は、「ゲーム機を持ち込んだAが悪い」ではなく。各人が負う責任と予測可能・結果回避など多方面からの検討ができているかどうかであるように思われる。この点について、2年生の感想では弁護士の意見を踏まえて「責任を見極めるには、その動作を予想で

きたか、防ぐことができたかを考えるのが大切だと思いました」(男子)と、行為の結果の予測可能性に言及したものがいくつか見られた。一方、3年生の感想でも「予想できたか?その予想を回避するための対策ができたか?という観点でみることを知った」などの言及はあるが、昨年度に既習しているからなのか、2年生ほどは多く見られなかった。

### 3. 検討・今後の課題

児童・生徒は、身近で生じた事象を分析するために、無意識に道徳的な規範意識や価値観を持ち出し検討しようとするが、現実社会においては、どのような立ち位置から事象を分析するかで、事象に対する責任と損害の負担割合が異なることを弁護士などの助言から学んだ。その意味で、このような法教育授業は、多面的・多角的な考察の重要性を実践から習得する機会となるともいえる。前年度この授業を受けた生徒(3年生)の方が、多角的な分析をしているが、この授業を通じて定着したものであるかはこの調査だけでは判断できない。新学習指導要領では、課題を解決するための「見方・考え方」が重視されているからこそ、「法的な考え方」が重要となる。今後は、小学校からの連携、あるいは高校の「公共」との連携のなかで、習得すべき法的な考え方をどのように涵養し・発達させていくのかが課題となる。